

猿蟹絵本小考

矢口 裕 康

氾濫する民話絵本

一時の民話ブームはすぎさり、民話ものの企画も減少の傾向にある。“世界の民話”“日本の民話”等の企画もほぼでつくした感がある。しかし民話ものの企画といっても、二点ある。その一点は、いわゆる昔話採集家が、年寄りから聞き集めた資料を、その語りのまま記す学術資料としての採話であり、もう一点は、その採話を基にして、児童文学者を中心とした作家たちが、自己の主張をもおりこんで再創作した再話ものの作品である。

私がここで検討したいと思っているのは、後者のものである。これらは表①をみてもわかるように、小学校各学年や大人をも対象にすえた作品も多くみられるが、ここでは民話絵本に限って検討してみたい。ここにいう民話絵本とは、いわゆる採話を基にした再話本のことをさす。現在まで、ポプラ社版の全三十冊からなる“むかしむかし絵本”や、フレーベル館のフレーベ

表 ①

(55年版小学校・国語)

民話の再話教材

民話と文学の会 かいほう No. 27

高橋 知子氏 ㊦ 再構成したもの

出版社	日本書籍	東京書籍	光村図書	教育出版	学校図書
一年	(上) おおきなかぶ (内田莉莎子)	大きなかぶ (内田莉莎子)	おおきなかぶ (西郷竹彦)	おはなしのたび おむすびころりん けんかした山 大きなかぶ (内田莉莎子)	おむすびころりん おおきなかぶ (内田莉莎子)
	(下) なし	ありのおんがえし (ひらいよしお訳) かもとりごんべえ (岩崎京子)	なし	てんぐと おひやくしょう (宇野浩二)	なし
二年	(上) かむかし (木下順二)	なし	なし	なし	なし
	(下) なし	かさこじぞう (岩崎京子)	かさこ地ぞう (岩崎京子) スーホの白い馬 (大塚ゆうぞう)	かさこじぞう (岩崎京子)	かさこじぞう (岩崎京子)
三年	(上) なし	なし	かっぱとてんぐ (米津千之)	なし	きつちよむさん (今村祐行)
	(下) 雪女 (無署名)	山なし取り (松谷みよ子)	力太郎 (上笙一郎)	ふえをふく岩 (君島久子訳) 夕鶴 (木下順二)	なし
四年	(上) なし	お話づくり チワンのにしき (君島久子訳)	なし	なし	なし
	(下) 夕鶴 (木下順二)	なし	なし	八郎 (齊藤隆介)	なし
五年	(上) なし	なし	なし	なし	木龍うるし (木下順二)
	(下) 木龍うるし (木下順二)	なし	木龍うるし (木下順二)	木龍うるし (木下順二)	なし
六年	(上) なし	なし	なし	なし	なし
	(下) なし	なし	なし	なし	なし

ルの絵本等として高い評価をうけているものである。また、最近民話教材の小学校教科書への採扱が物議をかましたのは記憶にあたらしい事実である。表①をみてもわかるように、小学校教材としても、このように多くみだすことができた。この観点からしても、民話絵本をここ

で評価する意味があると思う。また、その意味には次の観点をも含んだものとしてもおさえない。保育所・幼稚園をはじめとした幼児教育の現場が、小学校就学前の存在としてあるということである。いわゆる幼保は小を意識した存在とすれば、民話絵本の検討など、幼保と小をつなぐ教材として恰好のものと思える。

しかし、民話絵本と一口にいても、さまざまな形態があると思うので、ここでは、ひとつサルカニ絵本のみにしぼって検討してみたい。この話「猿蟹合戦」は、^{注①} 五大お伽話のひとつで、日本の昔話の代表的なものといえるかもしれない。話の大筋は、

表②

	書名	文	絵	発刊年	開き方	本の形(cm)	出版社名	値段(円)	
昭和40年代	① 1	かにむかし	木下 順二	清水 寛	昭34	右	$\frac{16}{\square}$ 20.6	岩波書店	320円
	2	さるかにばなし	西郷 竹彦	福田 庄助	昭42	右	$\frac{20.5}{\square}$ 26.2	ポプラ社	550円
	3	さるかに	松谷みよ子	瀬川 康男	昭45	右	$\frac{22.5}{\square}$ 28.5	講談社	1,200円
	④ 4	さるとかに	波多野勤子	川上 四郎	昭46	右	$\frac{19}{\square}$ 26.5	小学館	220円
	5	さるとかに	神沢 利子	赤羽 末吉	昭49	右	$\frac{21}{\square}$ 30	銀河社	1,100円
昭和50年代	6	さるかに	堀尾 青史	村上 勉	昭51	右	$\frac{21}{\square}$ 26.3	フレーベル館	850円
	7	さるとかに	筒井 敬介	村上 幸一	昭51	左	20 $\frac{19.7}{\square}$	小学館	380円
	8	さるかに	松谷みよ子	滝平 二郎	昭54	左	24.5 $\frac{21.5}{\square}$	岩崎書店	880円
	9	さるかに	岩崎 京子	田木 宗太	昭54	右	$\frac{21.7}{\square}$ 26.5	講談社	450円
	10	さるとかに	杉山 徑一	渡辺 三郎	昭55	左	21.6 $\frac{26}{\square}$	コーキ出版	980円
	11	さるとかに	木暮 正夫	赤星 亮衛	昭56	右	$\frac{21.5}{\square}$ 26.1	第一法規	980円
参考	まんが日本昔ばなし第66話 さるかに合戦			昭52	右	$\frac{10.5}{\square}$ 14.8	二見書房		

- ① 猿（柿の種）と蟹（おにぎり）の交換。
- ② 蟹柿の種を得、それを蒔き種→芽→木→実と成長。
- ③ 猿の柿の横どり。青い実をぶつけられる。
- ④ 蟹の親の死、子蟹の誕生。
- ⑤ 子蟹の助っ人あられ仇討ち。

という形である。それにしても、この絵本だけで十二種のをみいだすことができた。絵本という観点から少しはずれたものとして、TV放映の『さるかに合戦』をここでは省き十一点を検討のまな板にのせてみた。（表②参照）

結論からいって、この十一点の作品を検討してみると、どうしても昭和三十四年木下順二文・清水寛絵の『かにむかし』をのりこえる作品の存在はないといわざるをえない。そして本の装幀等華美になって、見ても楽しい側面をもってきているのは事実であるが、私のしりうる限り最初のサルカニ絵本の垂流が、続々生み出されてきている感さえする。とくに一番新しい第一法規版『さるとかに』などは、論外といわざるをえない。この企画は「日本の民話絵本」というシリーズで、かつ「民話絵本の決定版」とさえ銘うったものである。これが決定版のサルカニ絵本だとしたら、この作家は再話ということについて、どのような考えをもって取り組み、作品化したのか疑わざるをえない。この点については後述するとして、以下「再話と残酷性」そして「再話とは」という形で、サルカニ絵本をとうして、私なりの再話観を述べたい。

再話と残酷性

「猿蟹合戦」は前後半部に大きくわかれ、後半部は仇討ちのくだりとなっている。^{注②}宮崎県宮崎郡の原田亀三郎氏は、この仇討ちのくだりの最後を、次のような形として話している。「さあたいへん。猿どんは戸口の方へ逃げだしましたが、今度は、戸の上の鴨居から、唐臼どんがドスンと猿どんを押しつぶしました。そこで走ってきたガニ太郎が、ちょきんと猿どんの首をはねました」と見事な仇討ちである。眼を転じれば非常に残酷な形でおわっていると言える。

私の検討した十一点の絵のうちでも、結末が「あかつらの猿の奴は、大きな石臼におつぶされ、物も言わず、べたーんとひしゃげてしもうたそうな」^{注③}(②)という形のものが八点で、大半である。しかし、ここでは猿の死を明確にはうちだしておらず、「物も言わず」に代表されるように「べたんとひしゃげてしまいました」(⑤)「キュウとぶつつぶされてしもうたと」(⑥)という形で、暗示の域をでないものである。しかし宮崎県のサルカニは、その後ガニ太郎という蟹の息子が走ってきて、猿の首をはねているのである。

一時、昔話には残酷なものがある。そのようなものは話してはいけないとか、子どもにそのまま与えるものではないという見解が提起されたことがある。そのことを、ここでは少し考えてみたい。その流れにそう残酷否定形の結論を思わせる絵本が、十一点のうち二点見出せた。杉山文の『さるとかに』は、表③をみてもわかるように、一般のサルカニ絵本の形と違い、杉山サルカニと呼べるようなものとして作品化している^{注④}ので、もう一点のものと同視することはできない。この作家の執筆姿勢は、少なくとも大藤幹夫氏の指摘する「〈文〉である。〈文〉であるかぎり、それなりのオリジナリティが見られるはずだが、ほとんど稀薄である」としたものの、ほとんどにはあたらぬ杉山独自のものとして作品化している。

しかし、もう一点の波多野文のサルカニは、他のサルカニ絵本でみられた、親蟹の死から子蟹の誕生という形もみられず、この絵本の展開は、兄の蟹が大けがをし、弟の蟹が見舞いに来た仲良しの蜂・栗・白・コンブと相談し、こらしめに行くという形になり、結局「『本当に僕が悪かった。もう悪いことはしません。堪忍して下さい』猿はあやまりました。みんなは許してやりました。そして仲良しになりました」という形で話をとじている。言わゆる「メデタシメデタシ」の結末である。しかし日本の昔話は、めでたしめでたしの形でおわるものばかりではない。ましてや、この「猿蟹合戦」をこのような形でとじたとしたら、その話の生命を奪ってしまうことになるのではないだろうか。

このような再話の形にする根拠として、波多野勤子氏は「あとがき」の中で、次のように述べている。「子どもには復しゅう物語をしてやるのはいらないことですが、しかし小学校一、二年頃までは、動機はどうであろうと、結果として悪いことをしたものは、当然悪いむくいがある、という考えを強くもっている時代でもあって、この年齢までの子どもの道徳は、すべてこれからわり出されているともいえます。そこで、そのことを頭に入れながら、しかも今日の教育を取入れていく工夫をしたのです」この指摘を基に考えれば、「この年齢までの子どもの道徳は、すべてこれからわり出されているともいえます」という教材となりうる作品を、子どもの前に提示すべきではないだろうか。そのことは、子どもに対して残酷さをおし隠すことではなく、むしろ残酷な面を残酷としてのみとらえるのではなく、その話の真のねらいを、作家自身が明確に把握した上で、再話化すべきではないかと思うのである。

この「猿蟹合戦」は、別に親蟹の仇をうつことだけが話の骨子でなく、その前半部としての柿の種とにぎりの交換、その種を大事に育てていく蟹の姿、そしてやっと実のなった柿を奪いとる猿、そして青柿をぶつけられ親蟹の死から、再生したものとしての子蟹の登場という形に

なる重要な展開がある。関敬吾氏は、この話は柿の部分と仇討ちの二つの話の結合型であると指摘しているが、この話は前半部なくして後半部の存在はありえないのである。

それゆえに、その部分を明確に提示するため、西郷竹彦氏は「民話^{注⑤}というものは語り手も聞き手ともに働く民衆です。ですから、語り手は民話の世界に登場する人物に対して、ある者には『さん』づけし、ある者には『やつ』よばわりするということになります。わたしはこの再話にあたってこの語り手の態度を忠実に守って、働く貧しい百姓の蟹に対しては親しみをこめて『かにどん』と呼び、憎い猿に対しては『あかつらのさるのやつめ』とにくにくしげに呼び捨てにしました。聞き手の子ども達もこの語り手の口ぶりから、どちらが民衆のがわの人物なのかをすぐ知ることができるのです。また語り手である民衆の心をじかに感じとるのです」とし、どんと奴を使いわけている。多くの絵本が、さるどん・かにどんと使っているのに対して、愛称ひとつにしても、このような作家の意思をこめて作品化している。

西郷サルカニは、この他においても語り始めを「むかしむかしのそのまたむかし、わたしのじっさまやばっさまがまだうまれてもおらなかつた、ずうっとむかしのことでござった」として、昔話の世界へ、その語り始めだけ聞かされても、ひきこまれていきそうな配慮がなされており、氏独自の再話観が作品化されたものとして評価できよう。

波多野サルカニが、このような点をふくめて再話化されたとすれば、「あやまり型」の猿蟹合戦として作品化されるはずがないと言っても過言ではないだろう。多くの昔話を再話化している松谷みよ子氏も、ポプラ社版『したきりすずめ』^{注⑥}のあとがきの中で、次のようなことを述べている。「最近『舌切雀』を残酷である、子どもはあまり好まないという話を聞きました。(略)しかし、また、ある人は言います。『舌切雀の舌を切られる痛み、それこそが大事なんだ！あのチツと感じる鋭い痛み、そこに人生の真実がある。それを残酷だなんぞいうのはわかつたらん！』わたしもこの意見に賛成です。しかしどうも幼い日の思い出が絵巻物風であったとなると、これはどういうことなのか……。わたしはそれでいいと思うのです。幼い日、素通りしてしまったお話のなかのある真実が、おとなになってキラリと光ったとすれば、それでいいのではないのでしょうか」松谷氏がここにいう「真実」や「キラリと光るもの」が、波多野再話では生じてこないのではなからうか。

しかし波多野氏は「今日の教育ではむしろ相手にその非を悟らせて、いい人間にさせるように友だちみんなが努力するほうがいいということになっています」と、復しゅう・仇討ちは現在はいけなないのだということをも指摘しつつ、自己の立場を主張していくのである。しかし、そうであらうか。このような立場こそ、校内暴力などをはじめ学校という所が問題をかかえている存在へとおしやっしてしまっている、一因のように思えてならない。少なくとも、昔話には門外漢であった氏の眼鏡違いの再話といわざるをえない。

その結果か、十一点のサルカニ絵本のうち、「あやまり型」とでも称せる形の結末をもっている作品は、表③の二点しかないのである。他の再話作家は、一応に昔話の原話の形を、基本的に踏襲しているのである。そして、もうひとつ大きな事実がある。波多野氏にいわしめれば残酷なこの種の昔話を、「カタリ」として聞いてきた子ども達が多数存在し、かつ成長しているという過去の事実そのものを忘れてのではなからうか。

このように検討してみると、一流の人により再話化され、一流の出版社・小学館から出版されているから、安心して子どもに与えることができるということだけでなく、こんなに多くのサルカニ絵本と遭遇できる現代という時代においては、教育者・保育者は、それをみきわめる眼をもたなくてはと思うのである。

表③

項目	書名	さるとかに(波多野勤子・文)12場面の絵	さるとかに(杉山徑一・文)16場面の絵
語り始め		×	むかしむかし
物語の始め		かにかにおにぎりを見つめる。	かに大きなおにぎりどぶつかり猿柿の種拾う。
交換		猿もっていた柿の種と交換。	猿が無理やりとりあげる。
柿の成長		種→芽→大きな木→柿	雀の助言「まけば芽がでる柿の種ちゅんじきになる赤い柿ちゅん」種→芽→木(ずん)→青い柿の実→赤い実
柿を投げる場面		青い柿	青い実ばかり
親がにの死		× (大けがをする)	× (穴ににげこむ)
子がにの登場		×	×
仇討ちのきっかけ		仲良しの蜂栗白コンプが見舞いにくる。猿の意地悪を直す相談をする。	雀の助言「かにどんの仲間がかーやがや。かにどんのはさみはぎーざぎざ。ちゅんちゅんいったいなんのため」
助っ人(配置)		栗(いろり)・蜂(水がめ)・コンプ(縁側)・白(屋根)	かにの仲間・土手のいがりたち・蜂・青柿(みんな土手の上)
物語の終り		「本当に僕が悪かった。もう悪いことはしません。堪忍して下さい」猿はあやまりました。みんなは許してやりました。そして仲良しになりました。	かにははさみで猿のお尻をぎゅううつ。「あいたた一つ。かにどん堪忍堪忍。あやまります」猿が本気であやまったので、かにははやつとはなしてやりました。
語り収め		おわり	×

再話とは

次にもう一点の再話絵本の検討をとうして、再話ということをもう一步進めて、明確に位置づけてみたい。

そのもう一点とは、最近「民話絵本の決定版」として企画された、第一法規による日本の民話絵本の一冊『さるとかに』である。この絵本は副題に新潟県とあるように、新潟県の昔話を基に、「刊行の言葉」にあるように「作家も画家も心をこめて絵本化いたしました」とするものであれば、この絵本の文を書いた木暮正夫氏の再話姿勢を疑わざるをえない。絵本ということであるので、当然のこととして絵にも一言ふれる心要を感じるが、ここでは〈文〉にしぼって再話観を述べたい。

表④をみてもわかるように、この絵本は、それ以前にでた岩崎京子文『さるとかに』と非常に類似しているのである。岩崎氏の一文「さるとかに」についてみると、氏も新潟県蒲原地方の昔話を再話化したということであれば、類似もうなづけるところもあるが、どこに木暮氏が筆をとった証があるといえるであろうか。

あえて岩崎サルカニと違った部分を拾っていくと、

① わらを買った金を買うものの違い。

② 子蟹誕生のさいの擬態語。しかし、これも独自性ということではなく、木下『かにむかし』にも類似表現があり、かつ神沢利子^{注⑧}『さるとかに』においては、この「ずぐずぐ」という表現が使われているのである。西郷文『さるとかにばなし』でも「ずぐずぐ、ずぐずぐ」と木下と同じ表現になっているが、このことについて、西郷氏は『民話の世界・民話の理論』の中で次のように述べている。「木下さんの再話によって、その部分を引用してみよう『……そうすると、つぶれたかにかのこうらの下から、かにの子どもがグズグズ、グズグズとたくさんはい出

表④

項目	書名 かにむかし (木下順二文) 22場面 の絵	さるかに (岩崎京子文) 15場面 の絵	さるとかに (木暮正夫文) 15場面 の絵
語り始め	むかしむかし	むかしむかし	あつてんがの
物語の始め	潮くみをしに行き一粒の柿の種拾う	かにわらを背負い市へ売りに行く	かにわら束をかついで町の市へ売りに行く
柿の種の入手法	浜べで拾う	わらを売った金でくしがきを買って帰る	わらを売った錢で赤い柿の実をひとつ買って帰る
柿の成長	種→ちいさな芽→大きな木→たくさんの実→まっかにうれる	種→芽→でっこい木→み→秋になるとまっかに熟す	種→ちっこい芽→でっかい木→どっさり実
柿の木をもいでくれるものの依頼	×	「この柿の実もいでくれるもんがおったらーかごやるんだが」	「はてもさても困った。誰ももいでくれたらお礼に柿の実をかごに山もりやってもいいだが」
柿を投げる場面	まだ青い顔をして重たそうにゆれておった大きな柿	青い柿の実	青い柿
親がにの死	○(べしゃり)	○(かしゃっ)	○
子がにの登場 <small>(登場のさいの擬態語)</small>	○(すぐすぐずくずく)	○(がしやがしや)	○(ずくずくずくずく)
仇討ちの準備	子がには成長するのをじつとまききびをまききびが実るとききび団子を作りそれを腰につけ行く	×	子がには成長すると川のそばにきびをまききびが実るとききび団子を作りそれをつづつ食べかつ腰につけ行く
助っ人と配置 登場のさいの擬態語 ↓ 仇討ちのさいの擬態語	大ぜいの子がにども→土間の大きな水筒の中 (がしやがしや、がしやがしや、がしやがしや、がしやがしや、がしやがしや、がしやがしや) ばんばんくり→いろりの灰の中→(ばんん) はち→門の上の鴨居の所 (ぶんぶん)→(ぶんん) 牛のふん→戸口の敷居の外 →(つるり) はぜ棒→石臼をささえる <small>(牛のふんの脇)</small> (とんとん)→(ごつうん) 大きな石臼→軒下の所 (ごろりごろり)→(どしーん)	子がに→水がめの脇 (がしやがしや) しばぐり→いろり (ころんころん)→(バババーン) なっきり包丁→みそ桶 (じゃつきりもつきり)→(ざりり) たたまばり→ふとん (しくむくしくむく)→(しくん) 牛のくそ→表 (ねっちらもつちら)→(つるりん) (ねっちらもつちら) 白→屋根 (ごろたんごろたん)→(どたん)	かに達→水がめの中 (がしやがしや)→(がしやがしや) ばんばんぐり→いろりの中 (ばんばん)→(ばんん) たたみさしばり→わらざぶとん (しくもしくもく)→(しくつ) なっきり包丁→みそ桶 (じゃつきりもつきり)→(じゃきつ) 米つきうす→戸の上 (ずしんごろごろ)→(ずしーん) 牛のくそ→土間の入口 (ぬっちらもつちら)→(ずりつ)
物語の収め	「大きな石臼がどしーんとおちてきて猿はひらとうへしゃげてしまうたそうな」	「かにの子たちは首尾よく仇をうったんだと」	「猿はべしゃんとひしゃげてそれつきり」
語り収め	これでおしまい	市がさかえもうした	いちやばんとさけた

してきたそうな』ここには、どんなに圧えつけられ、つぶされても、なお、その足もとからはねかえし、立ちあがってゆく不滅な不屈な民衆のエネルギーが感じられます。『オイオイ』と泣いている子蟹のイメージと『グズグズ、グズグズ』はい出してきた子蟹のイメージのあいだには、たいへんなちがひがあります。ところが、わたしは、あとでこの『グズグズ』のところが、妙にひっかかって気になりました。なぜ、とたずねられるとその説明にこまるのですが、どこかこの話の体感は、不屈な立ちあがる民衆のイメージを弱めるように感じているのです。

わたしは、あらためて、この『かにむかし』の原話をしらべました。そして、ある原話で、この部分が『ズグズグズグズ』と語られているのを発見してはっと膝をたたく思いがしました。『ズグズグ』は、『ズグズグしないでさっさと歩きなさい』というときの、あの『ズグズグ』の体感と共通しているのです。だが、『ズグズグ』のほうは、いかにも、内から湧きあがってくる力を感じさせました。あるとき、わたしは木下さんにそのことを話しました。さすがに作家です。こちらが一言言いかけただけで、その説明もせぬうちに、即座に『そうですね』と合槌をうたれた。わたしは、作家というものの、ことばにたいするきびしき、するどい感覚を眼のあたりに見る思いがしました。(略) いいいわすれましたが、ズグズグとズグズグのちがいは、ただ、語感のちがいという感覚的な問題だけではないのです。肝心なことは、このズグズグという体感には、革命的な民衆の思想・論理が裏打ちされているということです。感覚と論理が表裏一体となっているということなのです」とあるエピソードを指摘している。たったひとつの擬態語について、これだけの神経を使って書きあげているからこそ、木下『かにむかし』のもっている意味があるのである。昭和四十二年、西郷氏も『さるかにばなし』として、猿蟹絵本を再話化しているが、このような眼をもった氏であれば、「ズグズグ」の同一使用もうなづけるのだが、木暮氏の「ズクズク」はそれだけの言葉との対決があった上の使用であろうか。疑問に思える。

③ それゆえに助っ人にしても、その登場のさいの擬態語にも同一なところが、岩崎『さるかに』と比べてみても多い。ただ、たたみ針の待ちかまえている所が、岩崎氏の「ふとん」であるのに対して、栗がはね、とびあがったあと猿がおちてくる所が「わらざぶとん」というぐらいの違いであろう。またきび団子のくだりにしても、木下『かにむかし』にみられるところである。

ひとつ、サルカニ絵本が十一冊もあることも疑問であったが、この木暮氏の再話姿勢は疑問だけである。氏のあとがきのようなものがないので、作品化されたものからしか述べられないが、絵本となり作品化したものから主張するのが作家の命とすれば、まんざら私の指摘も的はずれとはいえない。

サルカニ絵本の先覚者・木下順二氏は『日本民話選』のあとがきの中で、「このことば(再話のこと)の定義は、民話の再創造ということばのそれとともに、こんご厳密に検討されて行かねばならないだろう。上にわざと一、二思いつき程度の規定をいっておいたが、再創造ということばにもおなじ程度の簡単さでふれておくと、再創造とは民話を素材としてはいるが、解釈にも表現にも作者が作者自身のものを自由に駆使した場合で、自作を例にあげるのはいへん気がひけるが、説明の便宜上ゆるしてもらうなら、戯曲『夕鶴』などはその部類にはいるだろう。この本の中でも、^{注⑩}『木竜うるし』や『瓜コ姫コとアマンジャク』などはその傾向をもっている」としている。木下氏の指摘をまつまでもなく、再話は、民話ここでいう民話とは、年よりから子どもへという形等で語り継がれてきた採話のことであるが、この採話を再創造すべく作家自身の息吹きが吹きこまれて作品化されたものが再話である。ゆえに再話化するということは、その作家によって新たな民話の誕生でなくてはなるまい。この木暮氏の作品を、そのようなものとして評することができようか。

現在、民話絵本と称するものは、このサルカニ絵本をみるまでもなく多数あり、氾濫している。これら教材の豊富な現象というものを、自分なりにいかし絵本指導していく上には、教育者の眼が必要となつてこよう。その意味からも、この再話ということを自分なりに検討し、その一視点でも描きだせればと思つて小考を記した。

注①五大童話または五大国民童話とも称され「桃太郎」「猿蟹合戦」「舌切り雀」「花咲爺」「勝々山」の五話をさす。

②『日向の民話・第一集』（昭和三十三年刊）「猿カニ合戦」

③以下（ ）内の番号は表②内による。

④『日本児童文学』（昭和四十八年刊）「再話、における〈責任〉」

⑤『さるかにばなし』（昭和四十二年刊）「さるかにばなしの世界」

⑥「したきりすずめ」について（昭和四十三年刊）

⑦「さるとかに」について（昭和四十二年刊）

⑧昭和四十九年刊。

⑨シリーズ民話と教育 3（昭和四十四年刊）

⑩昭和三十三年刊。

⑪木下氏の指摘に同調したのか、教科書にも四社で小学校五年の中でとりあげられている。

（表①参照）